



Fig 2.367 Surface chart at 2000L, 20th Sep

上前淳一郎

洞爺丸はなぜ沈んだか

著者略歴

1934年岐阜県に生まれる。東京外国語大英米科卒業後、朝日新聞社入社。通信部、社会部記者を経て退社。以後評論家として幅広い執筆活動をしている。1977年『太平洋の生還者』（文藝春秋刊）で第八回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。著書に『支店長はなぜ死んだか』『英雄たちへの挽歌』『狂気』（以上文藝春秋刊）『世界の一流品紀行』『世界の性革命紀行』（以上講談社刊）等がある。

洞爺丸はなぜ沈んだか

昭和五十五年十一月二十五日 第一刷

定価一〇〇〇円

著者 上 前 淳一郎
うえ まえ じゅんいちろう

発行者 半 藤 一 利

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

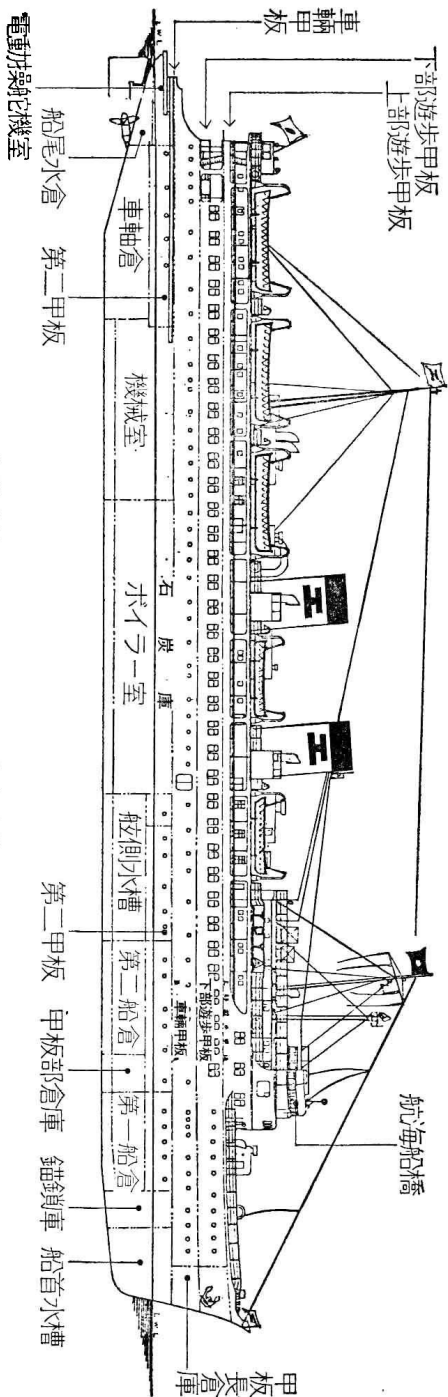
東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 東京（二六五）一二一一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 大日製本

*万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

洞 爺 丸



主要寸法

長さ(垂線間)	113.200 ^m
幅	15.850
深さ	6.800

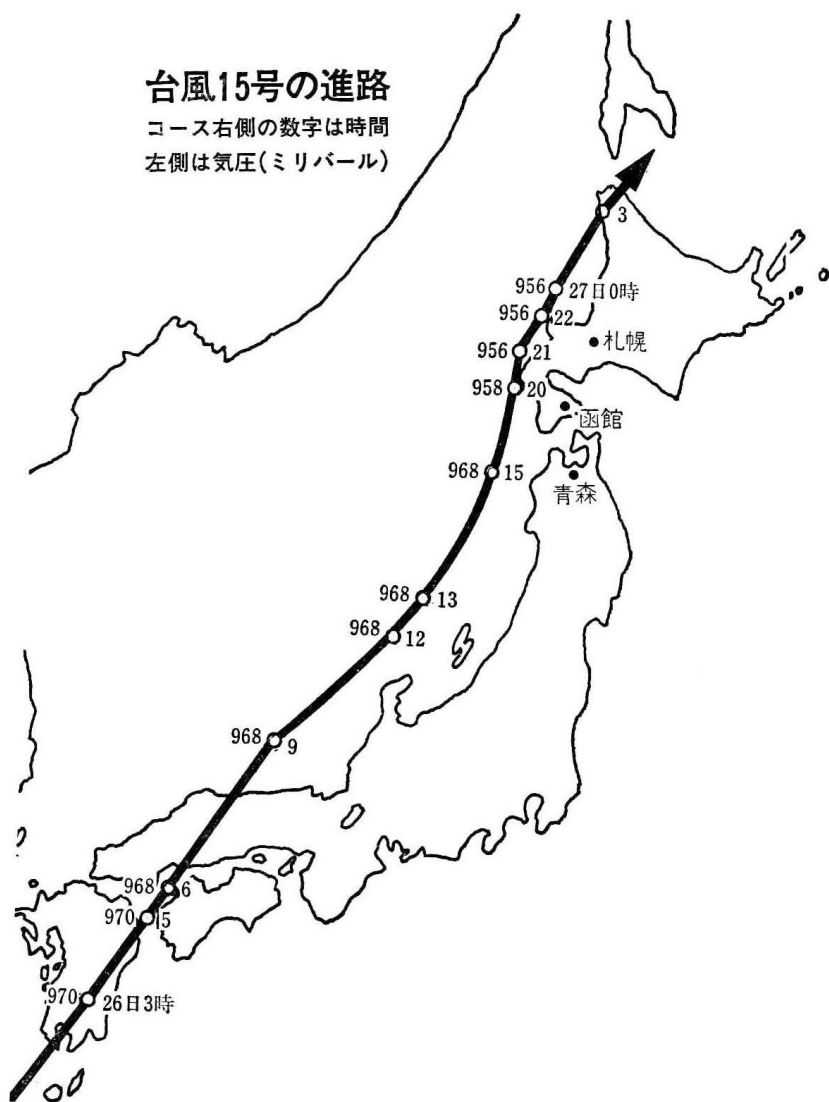
旅客定員

一等	69人
二等	30
三等	194
雑居室	655
椅子席	188
合計	1136人

台風15号の進路

コース右側の数字は時間

左側は気圧(ミリバール)



洞爺丸はなぜ沈んだか／目次

第一章 〇六三〇時——一二〇〇時 9

鹿兒島に上陸した台風15号は猛スピードで北上し、それに追いかけるように洞爺丸は青森から函館へ向った

第二章 一二〇〇時——一四三〇時 45

函館棧橋の洞爺丸に様々な人生を背負った客たちが乗りこみ始めた。函館港の内外では風波が激しくなってくる

第三章 一四三〇時——一八〇〇時 75

台風が迫った。洞爺丸船長は出航見合わせを決める。船がやがて天気は回復のきざしを見せ再び出航準備に入った

第四章 一八〇〇時——二〇〇〇時 115

洞爺丸は出航したが、港の内外は予想を上回る荒天だった。船長はやむなく投錨する。しかし風は強まる一方だ

第五章 二〇〇〇時——二二〇〇時 145

洞爺丸は嵐にほんろうされ始めた。船の内外は混乱の極に達しつつある。そしてエンジンに故障が発生した――

第六章 二二〇〇時——二二五〇時 167

ついにSOSが打たれた。パニック状態の乗客を乗せたまま、洞爺丸は荒れくるう波に、その巨体を沈め始める

第七章 二二五〇時——二四〇〇時 201

洞爺丸は沈んだ。波間に投げ出された人々は幸運を求めてあがいたが、自然の猛威の前に力つき、敗れていった

終章 嵐が去って 229

夥しい犠牲者と様々なドラマを残して嵐は去った。一年後、海難審判庁は事故の原因を船長の過失と判定した――

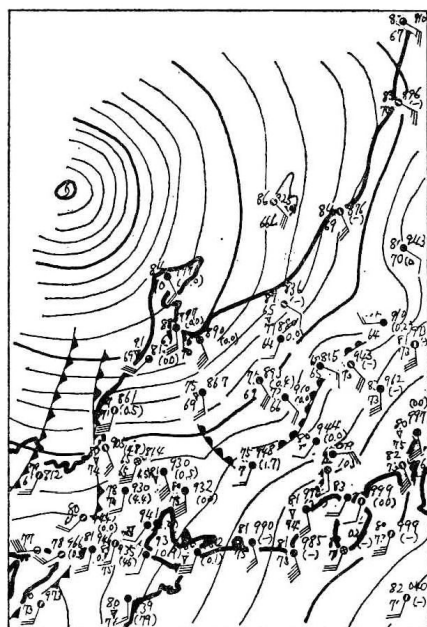
写真提供 共同通信

装幀

坂田政則

洞爺丸はなぜ沈んだか

第一章 〇六三〇時——一二〇〇時



26日11時

昭和二十九年九月二十六日、陸奥湾は朝から雨だった。

午前六時半の定時に青森を出航した連絡船下り三便洞爺丸（三、八九八トン）は、まっすぐ函館へ向けて北上していこうとしていた。船橋^{フリック}から見下ろす海は鉛色で、左舷側の津軽半島はぼんやりとけむって見えた。

船橋の中央に立った船長近藤平市は、風速計に目をやった。針は十メートルから十五メートルの間を気ぜわしく動いている。風向は東である。

「船尾、異常ありません」

雨合羽を着て船橋へ上がってきた二等航海士山田友二が報告した。出航配置^{スタンバイ}にあたって、船首を担当するのは一等航海士、船尾が二等航海士である。一等航海士はそのまま船内の巡視にまわり、少し遅れて上がってくる。

「はい、ご苦労さん。じゃ頼みます」

それだけいって、船長は腕時計をのぞきながら船橋を降りる階段のほうへ歩いて行った。七時

のニュースを船長室で聞くんだな、と航海士たちは理解した。天気図、とあだ名されている近藤船長が、今日のように台風が近づいている場合にラジオを聞き洩らすはずがないことを、誰もが知っていた。

代わって船橋で当直をする山田二等航海士は、雨合羽を脱いだ。函館まで百十三キロ、四時間半の航海だが、船長があらかじめ操舵手に指示してある航路通りに船を走らせてやるのが当直航海士の仕事である。

「この様子なら、そうがぶることもなさそうじゃないか」

三等航海士小石川忠男のほうへ、山田はいった。

「ええ。海峡へ出れば、少しやられるかも知れませんが」

当直の操舵手が上がってきて、紙片を山田に手渡した。無線室で受信したばかりの、中央気象台からの船舶気象無線通報(JMC)だった。

「二六日三時現在、台風マリー九七〇、九州、北緯三二度、東経一三一・二度、北東四〇ノット、最大風速七〇ノット、中心から半径一五〇カイリ以内四〇ノット以上。二七日三時の予想位置、北緯四一度、東経一四八度と、北緯三六度、東経一五六度の間」

山田は、その内容を船橋前部の天気図記載黒板に書きつけた。九七〇はミリバールで表わされる台風を中心示度である。

一カイリは約一・八五キロメートルで、一時間に一カイリの速度を一ノットというが、船乗り

たちはカイリと時速をキロメートルに置きかえるときには二倍して簡便に換算し、風の秒速をメートルで知りたい場合には二で割ってやる。

したがって、この台風の時速は八十キロ、最大風速三十五メートル、中心から半径三百キロの範囲では二十メートル以上の暴風ということになる。

黒板に描かれた日本地図の北緯三十二度、東経百三十一・二度の点に二等航海士は二重丸のしるしをつけた。宮崎県下にあたる。

「鹿児島から上陸してきたんですね。マリーというんですか」

三等航海士がいった。

第二次大戦後日本を占領したアメリカ軍は、北太平洋に発生する台風とその年の発生順に従ってアルファベット順に女性の名をつけた。日本側もこれにならない、カスリン台風とか、ジェーン台風、というように呼んだ。

昭和二十八年からは、中央気象台は第一号、第二号と番号で表わすことにしたが、しばらくはなじみになった女性名も並行して使われた。台風 *Mary* は日本側の数え方ではこの年の第十五号である。

「明朝三時の予想位置は、房総沖から三陸沖へかけてになる。いまから山陰まで来るとしても、そのあたりで転向して太平洋側へ抜けるだろう。午後の上り便は、ちょっと難儀になるかも知れんが……」

「まあ、たいしたことはなさそうですね」

三等航海士はほっとした表情でいった。洞爺丸は午前十一時に函館へ着き、そのあと午後二時四十分発の上り四便として、同じ乗組員によって青森へ運航されることになっている。

「船長に渡しておいてくれ」

二等航海士は、黒板に書き終えた台風警報を操舵手に返した。

巡視結果の報告のため船長室へ来た一等航海士水野円吉は、通路までラジオが聞えてきているのに気づいた。

JMCよりうんと時間的に早く入手できるラジオの台風情報は、今日のような場合とくに航行中の船舶にとって重要である。聞いている船長の邪魔をしてはいけない、と思って、一等航海士は部屋へ入るのをやめた。

「台風十五号は午前五時現在愛媛県の中部にあって、いぜん北東に進み、今後瀬戸内海を通過して正午ごろ北陸地方に接近する見込みです。……毎時九十キロの早い速度で北東に進み、……中心示度は九七〇ミリバール、中心域の外側の最大風速は三十五メートル……。裏日本にある寒冷前線との関係から、今後多少進路が北または東にそれることも考えられています」

台風のニュースが終ったところで、一等航海士はドアをノックした。

「船内異常ありません」

「はい、ご苦労さん」

船長はいい、ひとりごとのようにつけ加えた。

「九十キロだよ。上陸したら衰えそうなのだが、かえって早くなってきている」

中心示度や最大風速、暴風半径は、ついまいしがた操舵手が持ってきた午前三時現在の中央氣象台の観測と変っていない。しかし、それから九州、四国を横断する二時間のあいだに、速度は十キロも上がっている。

船長は椅子から立って、気圧計をのぞいた。針は一〇〇三ミリバールを示している。六時に見たときにくらべて一ミリバール降下しただけだ。

しかし、台風が九十キロの速さで近づいてきているなら、これから気圧は急激に下がり始めるだろう。

「正午には北陸へ来る。早いぞ。それに、裏日本の寒冷前線か」

「前線の影響で進路が北にふれば、こっちへ来ますね」

「来るかも知れん。まあ、飯でも食おう、一等航海士」

ちょうど朝食の用意ができていた時間だった。士官食堂への通路を一等航海士と並んで降りながら近藤船長は、食事をすませたらこれまでに集められている気象情報をもとに天気図を描いて、台風の進路を予想してみよう、と思った。ほんとに彼は自分で天気図をつくるのが好きで、得意でもある船長だった。